

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第3章



アベイ・デ・ガルディアン ～ オーヴェルニュ県 ～ 中央フランス

ガルディアン修道院は、大きな石の丘の上に建つ壁に囲まれた修道院で、フランス中央部の未開の地。修道院の地下には、複雑な迷路のような地下墓地が丘の奥深くを蛇行していた。ガルディアン修道院の托鉢修道士の中で最年長のイヴァン・ゴグ修道士は、10年以上前に修道院に着任した際に地下墓地の管理を引き受けた。そしてその間、広大な墓所は、彼の心に重くのしかかる、一種の石造りの苦行となっていた。粗末な修道服が、曲がりくねった通路でささやき声を上げながら、彼はまっすぐに、ひたすら下へと急ぎ足で進んだ。ほとんどの修道士は、これほど深いところまで足を踏み入れることはめったになかった。石壁に差し込まれたまばらな乾いた松明は、以前に使われた形跡がないことを示していた。

瀝青の通路には枝分かれした血管はなく、中空の動脈はまるで地獄へと続く黒レンガの道のように地中深くへと伸びていた。

イワンのサンダルの底がカチカチと音を立てる足音は、粗い石を彫った壁に反響することなく、空虚に響いた。さらに下っていくと、空気は冷たく淀み、鉄の錆と湿った岩の刺激臭が重く漂っていた。

下り坂が続く通路。道が急勾配になり狭くなるにつれ、石壁はますます狭まり、互いに迫り合うように迫ってきた。懐中電灯の光が、結露で覆われた濡れた通路の床をさらに照らし出した。片手に懐中電灯を持ち、もう一方の指で反対側の壁をなぞりながら、イワンは光り輝く花崗岩の道で滑らないように、慎重かつ計画的に、一步一步ゆっくりと進んだ。

このトンネルの唯一の目的は、地下の淡水泉を汲み上げ、修道院のカタコンベに清浄で豊富な水を供給することであった。

最も厳しいワイン造りの季節。そのため、日当たりの良い丘の斜面の非常に深い地下にトンネルが続いており、何世紀にもわたる自然浸食によって削られた不規則な石と滑らかな表面を持つ、広々とした洞窟のような空洞が現れた。やがて、松明の光は何も照らすものがない。ガルディアン修道士たちは、この暗く人里離れた場所を井戸の穴と呼んだ。深い石で囲まれた溝が空洞を二分し、速く静かに湧き出る地下の泉を導いていた。

井戸の穴の暗闇から、すすり泣きがトンネルにこだました。それは子供の声だったが、同時に、生涯にわたる苦しみの痛みを嘆く、悲痛な叫び声だった。

再び嗚咽が漏れたが、それは抑え込まれた。まるで、苦しみと哀れな胸の中で、悲しみと誇りが絶えずせめぎ合っているかのようなようだった。嗚咽に続いて、息を荒くする呼吸音が聞こえ、そして静寂が訪れる。そしてまた、悲しみが爆発する。その繰り返しが、暗闇の中でこだまする。

それは、敗北した王の嘆きと、悲嘆に暮れる未亡人の泣き声が、一つに織り合わさったものだった。

「ラザロ？」

泣き声は止んだ。

「ラザロ？そこにいるのか？」

「はい、ここにいますよ、修道士様。バケツに水を満たしています。」

僧侶が窪地に入ると、真っ暗闇はパチパチと音を立てる松明の光に屈した。僧侶は背が高く、広い背中と深い胸をしており、悲しみは彼の深く青い瞳は、唇に浮かぶ陽気な笑みとは裏腹だった。天使の落ちた光輪のように頭を飾る、手入れの行き届いた銀髪は、清潔で短く整えられた白髪交じりの髭とよく調和していた。ひどく背中が曲がった少年が泉から上がってきた。足元には水がいっぱい入った桶が置いてあった。彼は修道士と同じような粗い織りの布のローブを着ていたが、頭には深いフードを被っていた。同じ布でできたマスク、つまり顔を覆うフードが少年の顔を覆っていた。目があったと思われる場所には二つの丸い穴があり、小さな布のひだが口を覆っていた。汚れた覆いは、ハンセン病患者のマスクに修道士のフードを被せたようなものだった。少年は見習いだったが、彼の部屋は他の修道院の修道士たちの部屋とは違って地上にはなかった。

従者たちではなく、ラザロは修道院の敷地の下、カタコンベの中に、イヴァン修道士が彼のために用意した、粗末なベッドと分厚い毛布が備えられた趣のある部屋に住んでいた。彼は13歳だったが、小柄な体格と細い手足のため、実際よりもずっと幼く見えた。彼自身とイヴァン修道士、オディノ修道士を除いて、修道院の住人たちは誰も知らなかったが、ラザロはゴグ、つまりイヴァン・ゴグの非嫡出子だった。

「息子よ、何か悩み事でもあるのか？」

「いえ、大丈夫です。水はもう手元にあります。」

「泣いているのか、ラザロ？」少年は指を顔に押し当て、目の下の布が湿気で黒ずんだ。

「フードがずり落ちて何も見えない。頭を動かすとずり落ちる。口を開けるとずり落ちる。眠るとずり落ちる。耳に食い込んで、紐が髪に引っかかる。」

「では、新しいフードを作ってあげましょう。今度こそ倍の力を注いで、快適なフードに仕上げます。新しいフードはいかがですか？」

「この頭巾は臭い。もう洗ってもきれいにならないだろう。修道士よ、次の頭巾はもっといいものを作る方法を知っている。お見せしよう。」

「ならば、君に手伝ってもらおう。次の作品を作るのを手伝ってほしい。」イワンは身をかがめ、空いている方の手でラザロを抱きしめた。

「息子よ、君にサプライズを用意しているんだ。」

"それは何ですか？"

「写字室で動物に関する写本を発見しました。」

「鳥と一緒に？」

「ええ、この作品には鳥に関する葉っぱがたくさん使われていて、色鮮やかな鳥の絵も描かれているんですよ。」

「今晚拝させていただいてもよろしいでしょうか、修道士様？」

「ええ、お持ちしますよ。パリから届いたばかりの新品です！でも、他の人に紛失がバレないように、夜明け前に早く返さなければなりません。今晚には本をお渡しできますが、まずは掃除をしなければなりません。」

ラザロは一言も発せず、顔は覆われていたものの、物思いにふけるような雰囲気が漂っていた。麻布に覆われた顔は、修道士の方をじっと見つめていた。松明の光が、汚れた麻布の目穴から覗く、物悲しいほど美しい青い瞳を照らし出した。

「修道士様、一つお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「ぜひそうしてください。」

「私は大人になったら醜くなるのだろうか？」

イワンは少年の肩に手を置き、少年の注意を引こうとした。「よく聞け、息子よ。」

あなたは醜くありません。あなたは美しいです。あなたは醜さを隠すためにフードを被っているではありません。

あなたは醜さから美しさを隠すためにフードを被っている。醜さは美しさを悪として恐れる。

「清らかな心を恐れるのだ。」僧侶は突然立ち上がり、子供にその場にとどまるように諭すと、手に松明を持って窪みから出てきた。小さく丸まった姿は暗闇に包まれた。しばらくして、慎重な足音が静寂を破った。暗闇の中で、イワンは少年を見つけ、その前にしゃがみ込んだ。

「バケツを置きなさい、息子よ。」

イワンは足元の床を触って小石を見つけ、それを拳で包み込んだ。もう片方の手でも同じようにして、両手を握りしめて少年に差し出した。

イワンは左手を上げた。「ラザロよ、私の手に持っているものは何だ？」

「石だ。」

イワンは右手を上げた。「では、この手は？」

ラザロは「何もない」と答えた。

「ラザロ、本当に確信できるのか？」

「石を拾う音が聞こえた。それから、拾わない音が聞こえた。」

「石を受け止めろ」とイワンは突然言い、石を空中に投げ上げた。暗闇の中、彼は小石が床にぶつかる音を耳を澄ませた。しかし、音はしなかった。

「息子よ、一体何を持っているんだ？」

「その石だ。」

「ラザロよ、なぜそれがあなたの手にあるのですか？」

「あなたは私にそれを捕まえるよう命じたのです。」

「君が捕まえたのは、ただの石ころではなかった。」

「どうしてそれがより多くなのですか？」

「真実を告白する石だ。さあ、石を私に投げなさい。」イワンは自分の手に小さな手が触れるのを感じ、手を引っ込めた。「いや、息子よ、私があなたに投げたように、私にも石を投げなさい。」ラザロは素直に石を投げた。小石が床に当たると、カランという音がした。

「申し訳ありません、修道士様。もう一度投げなければなりません。」

「いや。静かにして、息子よ。よく聞きなさい。なぜ私は石を受け止められなかったのか？」

「光がなければ何も見えない。」

「確かに。では、その石は私たちにどんな真実を語ったのだろうか？」

「話すことはできません、修道士様。」子供の声には、かすかに面白がっているような響きがあった。

「だが、石は既に語り始めていたのだ！私が石を掴めなかったのに、お前が石を掴んだ時、石は全世界に、お前が本当に美しいと告白したのだ。私の言いたいことが分かるか、息子よ？」

「そうだよ」と少年はゆっくりと言った。

"あなたは？"

「ええ、修道士様。しかし、あとどれくらいかかるのでしょうか？」

イワンは立ち上がり、子供を抱き寄せた。「もうすぐだ。もうすぐ出発するぞ。」

「いつ頃ですか？」

「年末までにはブルゴーニュに引っ越す予定なので、君はもう二度とフードを被ることはないだろう。だが、その時が来たら、これまでで最高のフードを仕立ててあげる。それが最後になるだろう。」

「ミゲルとタテウスにも新しいフードを買ってもらえませんか？彼らのフードもずり落ちてしまうんです。本人たちがそう言っていました。」

ミグアルとタテウスはどちらも重度の奇形を持つ従者の少年だったが、ラザロとは異なり、修道院の階段に置き去りにされ、ガルディエンス修道士たちに引き取られて育てられた。しかし、ラザロと同様に、彼らもまた、醜い傷を隠すために目穴のある、らい病患者のようなフードを被っていた。このように、三人の少年は外見がそっくりであるという共通点を持っていた。三人でフードを被ると、まるで小さな麻袋の幽霊三人組のようだった。イヴァンはしばしばミグアルとタテウスをカタコンベに呼び出し、ラザロと一緒に働かせた。ラザロは常にカタコンベに閉じ込められていたため、イヴァンにとってこれはラザロ以上に大きな喜びだった。三人の少年にとって、巨漢の修道士イヴァンは彼らのマスクを作る人、救世主であり、面目を保つ人だった。そしてイヴァンにとって、幽霊のような子供たちが一緒にいるとき、ラザロが突然笑い出すと 地下墓地ではめったに聞かれない笑い声だったが その予期せぬ、そして忘れられない陽気さは、必ず彼の悩める心を静めるのに役立った。

「新しいフードも縫ってあげよう。息子よ、君自身が新しいフードを彼らに渡してあげてもいいぞ。そうしたいかい？」

"私は...するだろう。"

「よろしい、ではそうしましょう。」

「彼らも一緒に来てもいいですか？」

イワンは深呼吸をしてから口を開いた。「彼らはここに留まるべきだ、ラザルス。修道院は彼らの家だ。修道院は彼らにとって良い場所なのだ。」

「オディノ修道士は来てもいいですか？」

イワンは頭を後ろに反らせて笑った。「ラザロ、本当に！オディノ修道士なしで出発したら、追いかけてヤギで殴られるかもしれないぞ。」今度は子供が笑った。「ヤギで殴られたいのか？いや、もちろんオディノ修道士も一緒に行くさ。」

「ブルゴーニュへ？」

「ここから遙か遠く離れた場所だ、ラザロ。さあ、バケツを渡してくれ。やるべきことが山ほどある。」

「私が桶を運びましょう、修道士様。」

「いや。バケツをくれ、ラザロ。お前は次のバケツを運べ。」

イワンはたいまつを拾い上げ、少年に差し出した。「君が先導してくれ。」

「バケツが重いです、修道士様。私が運ばなければなりません。」

「松明を持って。先頭に立て。バケツは私が持っている。息子よ、先導しろ。」

少年はしびしび松明を受け取り、道を照らした。イワンが歩いているのを見て気まずさを感じていた。

彼の後ろに。

ラザロがメイン廊下の装飾的な壁彫刻を磨き上げるのに1時間近くが経過した。壁彫刻は長年の松明の油煙と煤で黒ずんでいた。その間に、満杯だった清らかな水が入った桶は、墨のように粘り気のある黒ずんだスプの半分ほどになってしまった。もう一度井戸へ水を汲みに行かなければならない。ラザロは桶を持ち上げて廊下を進み始めたが、すぐ横の壁の根元を黒いネズミが駆け下りてくるのを見て、びたりと足を止めた。クロディウス修道士が後ろから少年にぶつかり、桶が揺れて汚い水が少年のローブの前面に飛び散った。

「どけ！」と彼は唸り声をあげた。そして、長い木の棒でネズミを追いかけながら、ラザロの横を通り過ぎていった。

「お許してください、修道士様」ラザロはそう呟きながら、ローブの汚れを見下ろして廊下を進んだ。壁と柱の間にネズミを追い詰めたクロディウスに追いつくと、クロディウスは「捕まえたぞ」と怯えたネズミに言った。ラザロはネズミをちらりと見るために修道士の後ろに立ち止まった。ラザロが後ろに立っていることに気づかずにクロディウスはネズミを隅に押し付けて殺そうと、ゆっくりと棒を振り上げた。

突然、ラザロは水の入った桶を落とし、それをひっくり返して床に水をこぼした。その水で、閉じ込められていたネズミが隙間から飛び出した。汚れた水はクロディウス修道士の足元からローブにまで飛び散った。驚いたクロディウス修道士は叫び声を上げ、振り返ると、ずぶ濡れになったネズミが角を曲がって安全な場所へと逃げ去っていくのが見えた。

「お前！わざとやったんだな！」彼はラザロを叱責した。

「修道士様、お許してください」とラザロは答えた。彼はバケツを立ててひざまずき、修道士のサンダルについた水を急いで拭き取った。クロディウスは杖を振り上げた。ラザロは殴られる覚悟をした。

「クロディウス！」イヴァン修道士が廊下を駆け上がってきた。クロディウスは慌てて杖を下ろし、彼に言った。「彼が私に汚い水の入ったバケツを投げつけたんです！」

「何だって？」イワンは彼らの前で立ち止まった。彼はラザロとクロディウスの散らかった様子を調べた。ローブ。

「私がネズミを追い詰めたところ、そいつはネズミを守るために汚水を私にかけた！謝罪と即刻の処罰を要求する！」

「ラザロよ」とイワンは彼に尋ねた。「それは本当なのか？」

「バケツを落としてしまいました、修道士様。」

「意図的に？」

「はい、修道士様。」ラザロは頭を下げた。

「ほら !見て !まさに同じ量を集めたぞ !」とクロディウスは叫んだ。

「ラザロ ?なぜ ?」イワンは彼に尋ねた。

「汝、殺すなかれ、修道士よ」とラザルスは静かに言った。クロディウスは鼻を鳴らし、嫌悪感を込めて目を回した。

イワンは続けて言った。「しかし、その戒律は人間に適用されるものであって、ネズミには適用されないですよ？」

ラザロは足を動かし、少し間を置いてから答えた。「分かっています、修道士様、しかし」

イワンは彼の言葉を遮って言った。「それなら、あなたはあの善良な修道士に謝罪すべきかもしれませんね。」

「クロディウス修道士様、申し訳ありません。今、私の間違いを訂正していただきたいのです。」ラザルスは謙遜した。

イワンが二人の間に割って入り、ラザロに話しかけると、クロディウスは再び杖を上げた。

「お前の償いはこうだ。新しいバケツ一杯の水を汲んで、彫刻が施された壁を掃除することだ。」

さあ、先に進んでください。

「はい、修道士様。」ラザロは慌ててお辞儀をし、バケツを持って急いで立ち去った。

クロディウスは口をあぐり開けた。「その後、彼に壁の掃除をさせたのか !」

クロディウスより頭一つ分背の高いイワンは、彼の顔に近づき、唸るように言った。「どんな出来事だ

お前はネズミを追い払う以外に、私の地下墓地に居場所を主張するつもりか ?よく聞け お前は修道院の敷

地を管理し、私はその地下を管理している。お前が従者を叱責するなら、私も従者を叱責する !さあ、クロディウス、す

ぐに立ち去れ !

叱責された修道士は、廊下を怒鳴りながら駆け上がり、慌ただしく立ち去る際に叫び声やつぶやきを漏ら

した。「イワン、あの少年を懲らしめてやる !今すぐ修道院長に報告する !」

「どうぞそうしてください !そして、私の地下墓地でネズミを追いかけていることを彼に伝えてください。

「お前自身のものだ !」イワンは叫び返した。クロディウスは返事をせず、暗闇の中に姿を消した。

イワンは彼から背を向け、ようやく口元に笑みを浮かべた。それは、賭けに勝った男のように、ゆっくりと、そしてひそ

かに笑みを浮かべたものだった。彼は肩を後ろに反らし、両手を背中で組んだ。まるで死刑囚でありながらも誇り高く、

地獄への行進へと向かう囚人のように。そして、暗闇に飲み込まれながら、彼は地下墓地の奥深くへと降りてい

った。

クロディウスは気難しい男だった。修道院長でさえ彼にはほとんど寛容ではなかった。イヴァンにとって幸運なことに、

ヴォニグ修道院長は彼をまるで自分の息子のように思っていた。修道院長の目には、イヴァンは何をしても間違いを犯

さない存在だった。そして、修道院のすべての修道士が等しく、ごく自然に集まった。

イヴァンと親しくなることは、修道院長と親しくなることと同義であり、結果として、地下墓地のワインセラーに容易に出

入りできるという特権を享受できた。逆に、イヴァンを怒らせる最も確実な方法は、ラザロ、ミグアル、タテウスといった、奇

形のために呪われたか弱い従者たちを虐待することだった。

~*~

ラザロはとっくに仕事を終えていた。イワンは彼を鮮やかな鳥の絵が描かれた挿絵入りの写本から引き離し、寝床まで連れて行き、カタコンベで燃えている数少ない松明を消し、前夜のために修道士の寮にある自分の部屋へと戻った。ガルディエン修道院の修道士たちはほとんどがとっくに眠りについていて、数人の暗く幽霊のようなローブを着た修道士たちが、決められた深夜の仕事をするために月明かりに照らされた敷地内を漂っていた。

修道士デロン・オディーノは、小さな脇の扉から修道士の寮を出て、霧に覆われた中庭をこっそりと横切り、毎晩の楽しみへと向かった。彼は地下墓地の階段に入ってからようやく松明に火を灯した。数杯の酒を飲んだ後、彼は眠そうなラザロとワインセラーで合流した。二人にとって、これはごく日常的な習慣だった。彼らはそのスリルと禁断の喜びを楽しんでいた。ラザロはイワンが去った後は部屋から出てはいけないことを知っていたし、ワイン好きが修道院内でも周知の事実だったオディーノは、日没後は地下墓地に近づかないようにと警告されていたのだ。

今、オディーノは作業台の上に座り、足を前に広げて地下室の壁にもたれかかっていた。彼の周りの部屋には、熟成したワインの樽や澱の入った樽が所狭しと並んでいた。空気は、発酵した果物の粘り気のある刺激臭で満ちていた。

「ああ、ラザロ、坊や。てっきり眠っているのかと思ったよ。さあ、入ってこい！話せ！」オディーノは半分空になったゴブレットを振りながらニヤリと笑った。

イヴァンを除けば、オディーノは修道院の中でその少年を真に知っていた唯一の修道士だった。多くの点で、その太っていて頬の赤い修道士は、ラザロにとって叔父のような存在だった。叔父であり、友人でもあったのだ。

「私に来るって気づいてなかったのか？」オディーノはワインで濡れた唇から、だらしなく言葉を漏らしながら彼に尋ねた。

「何だって？」ラザロは眠そうに尋ねた。

「君とイヴァンと一緒に 修道院を出て行こう。」

"知りませんでした。"

「もし私を置いて行ってしまったら、二人とも追いかけてヤギで叩いてやるからね。」二人はくすくす笑った。「不思議なことに、この修道院が恋しくなるだろうな。」

「ワインは？」ラザロが尋ねると、オディーノは彼を非難するような目で見た。

ラザロは部屋の中を歩き回り、行く先々で物に触れ、どこへ行くわけでもなく、ただまた部屋の中を歩き回っていた。まるで子供の遊びのようだった。

やがてオディーノは再び口を開いた。「ここ数日、君の中に燃え盛る炎を感じた。君の血は熱い。君はこの地下墓地から解放されたいのだろうか？」

「本の中の世界ではなく、現実の世界を見たい。そして、鳥たち 生きている鳥たち が飛んでいる姿も見たい。」

あなたが連れてきた死体だ。

オディーノは豪快に笑い出した。「まだそれ持ってるのか？」

「翼を広げたら、バラバラになってしまった。包んで地下納骨堂の一つに置いた。修道士はイヴァン、いつブルゴーニュへ出発するか教えてくれないか？」

「もうすぐだよ、坊や。もうすぐだ。」

少し間を置いて、ラザロは「修道士様、一つお伺いしてもよろしいでしょうか？」と尋ねた。

"確かに。"

「修道院を去ることに、少しも不安を感じないのか？」ラザルスは言葉以上のものを彼の表情から読み取ろうとした。

「このルーティンに飽きてしまった。もう毎日についていけない。」

「では、修道院がなくなったら、私たちはどうすればいいのでしょうか？」

「まあ、まず第一に、私たちは日々の命令に従って生きる必要がなくなる。それはあなたにとって嬉しいことではないですか？」

「そうかもしれない…いや、分からない。」ラザロはフードを被った頭を下げた。

「もちろん、君には分からないだろう。君が知っているのは、この地下墓地の壁と、同じ退屈な日常だけだ。だが、すぐに分かるだろう。君はここにいるべき人間ではない。君の父親はそれをよく知っている。彼は私がずっと前から見てきたものを見ているのだ。檻の中で羽ばたく鳥のように。」

「どの鳥だ？」ラザロは地下室を見回した。「どこに？」

「あなたは鳥で、修道院は檻だ」とオディーノは説明した。

ラザロはオディーノの隣のテーブルに寄りかかり、「修道士よ、ワインは匂いと同一味がしますか？」と尋ねた。

「それならなおさらだ。」僧侶は微笑み、少年に華麗な乾杯の音頭をとってから、粗末な木製の杯から酒を深く飲み干した。

「臭いがひどい。きっと味もひどいだろう。」

「何杯か飲んだら、味なんて気にしなくなるさ。」オディーノは袖で口元を拭い、空になった器を少年に差し出した。「太って疲れた愚か者を助けてやれよ、坊や。」ラザルスはその器を受け取った。

「なぜあなたは他の修道士たちよりもワインをたくさん飲むのですか、修道士？」ラザロはワイン樽に近づきながら尋ねた。

「第一テモテ、5分の23ですか？」オディーノは慌てて尋ねた。

少年はためらうことなく言った。「もう水は飲まず、少しワインを飲むように。胃の調子が悪いし、しょっちゅう体調を崩すから。」

「もう一度 今度はラテン語で！」

ラザロは素直に、「Noli adhuc aquam bibere sed vino modico utere propter brassum tuum, et frequetes tuas infirmitates」と答えました。

オディーノは笑い、突然笑いを止め、指を鳴らした。「あの樽じゃない！こっちだ、

「坊や」とオディーノは別の樽を指差しながら言った。ラザルスはより近い樽に移動し、慎重に杯に水を満たした。「結局同じものなんですね？ ああ、この樽ですか、修道士さん？」
ラザロが戻ってきてオディーノに聖杯を渡した後、修道士は彼に「ルカ、5のうち39？」と尋ねた。

少年は再びためらわなかった。「古いものを飲んだ者は、すぐに新しいものを欲しがらない。なぜなら、『古い方が良い』と言うからだ。」
オディーノは豪快に笑い転げ、ワインを地下室の床一面にこぼしてしまった。ラザロは困惑した犬のように首をかしげ、彫像のように固まってしまい、その間にオディーノは我に返った。

するとラザロは尋ねた。「それは何ですか？私は正しく話しています。」
「確かにそうだ、ラザロ、君はいつもそうしている。だが、今、私はその秘密を発見した」と、修道士は抑えきれない喜びで震えながらどもりながら言った。「私の見るところ、君は小さな
その仮面の下には、とても小さな本が並ぶ写字室がある。そして、あなたは鼻でそのページをめくるんだ。」
「小さな本は持っていませんよ、修道士様」とラザルスはあっさり答えた。
オディーノは彼の真剣な返答に笑った。「でも、坊や、どうやってそんな風に一語一句暗唱できるんだい？」

「私は字が読めます。」
「しかし、言葉はあなたのように他人の心に深く刻まれることはありません。どうしてあなたは一度読んだだけで、それを永遠に記憶できるのでしょうか？この修道院にはそんなことができる人はいません。私の人生で、あなた以外には誰も知りません。その魔法の秘密を教えてください。」

「覚えているのはそれだけです、修道士様。」
「もちろんそうだよ、坊や」オディーノはため息をついた。「そして、そのような深い悲しみは神のみぞ知る。」
「あなたのような稀有な祝福は他にない。」彼は再びラザロに乾杯し、杯に残った最後のワインを飲み干した。それから彼はラザロに注ぎ足すようにと杯を差し出したが、彼は背を向け、地下室の入り口の方を向いた。

ラザロはオディーノの方を振り返った。「修道士様、誰かが近づいてきます！おそらく三人でしょう。」
オディーノはまるで椅子が燃えているかのように作業台から飛び降りた。彼はよちよちと急いで奥の壁まで行き、ワインの痕跡を口から念入りに拭き取りながら、ゴブレットを樽の後ろに隠した。ラザルスは反対側の壁に移動し、松明を台座から外し、油の入った壺に浸すと、地下室のすべての灯りを消した。部屋は漆黒の闇に包まれた。

暗闇の中、オディーノはラザロを最後に見た方向を腕を振りながら探した。「こっちへ来い、坊や。私を案内してくれ」とオディーノはささやいた。

「修道士よ、どこへ案内してほしいのですか？」
「静かにしろ、言葉遣いに気をつけろ。ここから連れ出してくれ。何も見えないんだ」とオディーノは囁いた。

焦燥感に駆られ、ラザロを探して手探りで探していた。

「どこへ行きたいのですか？」ラザルスはそう尋ね、オディーノの手を優しく握った。

「天使の炎よ !どこでもいいから、ここから出してくれ！」

「では、地下納骨堂へ？」

「そうだ、地下納骨堂だ !すぐに！」オディーノは低い声で言った。

ラザルスはオディーノをワインセラーから連れ出し、暗い通路へと導いた。「さあ、修道士」と囁き、オディーノの手を太い鉄の取っ手に導いた。修道士は重い扉を開け、最後に少年の声が聞こえた暗闇の方を指さした。

「中へ !急げ！」

「私はここにいますよ、修道士さん。」その声は今、彼の背後、墓の中から聞こえてきた。

「ラザルス、オディーノはドアを閉めながらささやいた。「どうしてそんなに多くのことを知っているのに、こんなにも何も得られないんだ？」

「修道士様、あなたの意図が理解できません。」

「もちろん違う。君は頭の中でページを読み解くことができるのに、私の言いたいことが分からないのか？」

「修道士様、あなたがどこへ行きたいのか存じませんでした。」

「ああ !それなら、あなたは私を惹きつけるのですね。」

「あなたは私にどこにいるのか教えてくれなかった。」

地下墓地の扉が開くと、オディーノは彼の言葉を遮って言った。「静かにしろ、坊主。奴らに来るぞ。」

3人の修道士は、松明と油の入った桶を取りに、トンネルを少し進んだ。そして、また慌ただしく去っていった。地下墓地の扉が閉まる音を聞くと、ラザロとオディーノは二人とも地下墓地からこっそりと抜け出した。ラザロは自分の部屋に戻り、まだ酔っていたオディーノは、壁沿いに地下墓地を出て、自分の寮の部屋に戻った。

一方、僧侶たちの寮の趣のある2階の独房では、イワンはぐっすりと眠っていた。細く開いた窓から、満月が部屋の簡素な様子を照らし出した。壁に木製の十字架が掛けられたベッド、本が並んだ書き物机、そしてイワンの持ち物が入った小さな木箱。あたりは静寂に包まれていた。

羽ばたきの音が暗闇の静寂を破り、光り輝くカラスが窓辺に現れ、その冷たい目はイワンをじっと見つめていた。部屋は凍りつき、イワンの吐息で霧が立ち込めた。するとカラスはたちまち部屋の中に飛び込み、裸の女へと姿を変え、素足で床を闊歩し始めた。

ルシファエルは長い髪を振り乱し、イワンのベッドの足元で立ち止まった。漆黒の瞳と小悪魔的な笑みを浮かべ、彼をじっと見つめた。「運命が再び私たちを結びつけたわ」と彼女は囁いた。黒い爪で彼の体をなぞり、「そのまま眠って、愛しい人」と言った。イワンは顔をしかめ、官能的な夢の世界に包まれた。「そして今度こそ、私たちの種が歴史を修復するでしょう あなたを墮落させ、

「同じよ」彼女は彼の覆いをそっと脇に寄せ、服のボタンを外し、彼を愛撫した。

「そして、私はあなたの下に横たわるつもりはない。」彼はうめいた。彼がそうしているのを見つけた彼女は、不運な馬に跨がり、乗りこなした。イワンの息は疾走する獣の鼻息のように勢いよく立ち上り、罪に囚われたまぶたの下で彼の目は激しく回転した。そして、悪魔が蒔いた情欲の短い期間に、それ以来百人の修道士が苦しんだように、また一人、ガルディアン修道会の修道士が墮落した。

～*～

夜明けはいつも通り訪れた。修道院の何人かの年長の修道士にとっては早すぎる時間だったが、ワインセラへへの前夜の巡礼を終えたオディノ修道士にとってはさらに早かった。寮のほとんどの修道士が目覚まらずずっと前に、年長の修道士たちは日課の仕事に取り掛かった。馬の世話、朝食の準備、その他様々な仕事で、彼らは一日の始まりに一番乗りする必要があった。年長の修道士イワンの夜明け前の呼びかけは、修道院の地下墓地に再び活気を与えていた。彼には、地下墓地の常駐従者であるラザルスが加わった。ラザルスは、地下墓地の多くの松明を作り、交換し、点火し、消火することで、その能力を証明した。二人の働きによって、トンネルは毎日多くの修道士と従者が行き来するにもかかわらず、常に清潔な状態に保たれていた。

不安を抱えながらも、カラスの精霊が以前に訪れたことに気づかないまま、イワンはいつもの日課をこなしていた。ベッドの下から布で覆われた木製の器を取り出した。それは前夜の食事がそのまま残っていた。燃え盛る松明と器を手に、彼は寮を出て、暗い修道院の敷地を横切り、地下墓地の入り口がある長い建物に入った。廊下を大股で進み、角を曲がると、木製の扉を勢いよく開け、松明を高く掲げながら石段を下りていった。地下墓地に入ると、彼の歩幅は長く、慎重だった。粗末なローブは、開け放たれた窓から吹き込むそよ風に揺れる手織りのカーテンのように、松明の光の中でゆらゆらと揺れた。

僧侶が古代の曲がりくねったトンネルの奥深くへと進むにつれ、彫刻が施された石の溝付き柱の間にある壁に沿って、アーチ状のくぼみが現れた。くぼみの壁には、精巧に彫られたグロテスクな人物像が並んでいた。奇妙な光景は、黒ずんで立っていた。

何世紀にもわたる松明の煙が立ち込め、人間と獣が醜悪に混ざり合った姿を描き出している。鳥や犬の頭を持つ騎士、人間の顔を持つ悪魔や肉食獣、恐ろしい特徴と毛皮に覆われた人型の四肢を持つ生き物がいた。

数百体もの像の中に、ただ一つ共通点があった。それは、どの像もコウモリのような骨ばった翼を一对の付けていたことだ。おぞましい壁面彫刻は、狂気に満ちた者だけが理解できるような、異形の集合体だった。

さらに下へ進むと、彫刻は滑らかな壁に変わり、

一連の木製の扉 :これらは、特権的な教皇高官、すなわち元修道院長、下級公会議の修道士、さらには数人の司教やその他の貴族のミイラ化した遺体を安置する地下室への入り口だった。修道士は、ある分岐点で右へ、別の分岐点で左へと進んだ。今、カタコンベは迷路のようなトンネルへと開けており、あらゆる方向に曲がりくねっていた。イワンは、石のブロックと彫刻された地下岩の迷宮の中を、慣れ親しんだ道を縫うように進んだが、彼の深い青い目は遠くを見つめ、暗く不安な海に沈んでいた。

しばらくして、彼は狭い入り口のそばで立ち止まった。壁のくぼみに松明を固定し、暗闇に身を乗り出して言った。「ラザロ、もっと食べ物を持ってきた。まずは食べなさい。それから松明に火をつけよう。」ローブのポケットから細い蠟芯を取り出し、松明に火をつけた。彼は部屋に入り、逆さまにした檜の樽の上に置かれた油ランプに蠟芯をつけた。薄暗い光が小さな部屋を満たし、壁際に置かれた小さな板張りのベッドが浮かび上がった。その上に眠そうなラザロが座り、フードを脱いで、拳で目をこすっていた。少年はあくびをし、太くて鈍い犬歯を露わにした。

彼の顔立ち、歯と耳を除けば、同年代の少年とよく似ていた。耳は、少年の耳というよりは、毛のない犬とエルフの耳を合わせたような形をしていた。彼は、真っ直ぐな黒髪が濃くもつれていた。太くて濃い眉毛。

鋭い藍色の瞳が弓なりに弧を描いていた。奇妙なことに、口を閉じ耳を覆っているため、他の少年と間違えられやすいかもしれない。ラザロの容姿は、嫌悪感を抱かせるというよりはむしろ異様で、どこか神秘的で、野性的でありながらも優しく、そしてどこか魅力的な雰囲気漂わせていた。ゆったりとしたローブが少年の細い肩に広がり、やがて足首のあたりでたるんでいた。粗い麻布の靴下が彼の足を包み、その底はほつれ、トンネルの床から踏みつけられた汚れで黒くこびりついていてた。

イワンは一瞬立ち尽くし、目を大きく見開いた。それから、寝台に向かって勢いよく歩み寄ったので、眠気でぼんやりしていた少年は壁に背中を押し付けた。「それを着けろ」と僧侶は厳しく命じた。「今すぐだ！」イワンは鉢をガチャンと置き、部屋中を探し回った。「どこだ？お前は常に頭巾を被っていないからならんだぞ、坊主！聞こえるか？常にだ！」僧侶の上の空な視線は消え、代わりに苦悶の表情が浮かんでいた。ラザルスはそれが怒りだと察したが、実際はそうではなかった。

イワンの厳しい叱責で少年は完全に目を覚まし、従って後ろに手を伸ばしてベッドからフードを取り、マスクを頭にかぶって文句を言った。「修道士、眠れない。フードが向きを変えて、私の息を塞いでしまう。

イワンは彼の隣に座り、ラザルスは頭を横に向け、イワンがフードの後ろの紐を締められるようにした。「構わない。常に着用しなければならない。どうしても必要なら、布のフラップを口元まで折り上げて構わないが、顔を覆うフードはつけたままにしておけ。」

「修道士様、新しい僧衣を着せていただいてもよろしいでしょうか？」

「まだできていない。まだ縫い合わせているところだ。」イワンは革紐を指でなぞり、時折締め直しながら、ラザルスは目で穴の位置を合わせていた。

「もうすぐ出来上がるよ」とイワンは声のトーンを少し落として言った。「さあ、この紐をしっかりと締めおけば、これはこうはならないよ。ああ、なるほど。君の髪が多すぎるんだね。」

「新しいフードが完成したら、薄くしよう。」紐をしっかりと結びながら、僧侶はベッドから起き上がった。「ほら、またしっかりと結んだぞ。もしまた外したら、必ず罰を与えるぞ、ラザロ。さあ、食べなさい。」イワンは鉢を取り、ラザロの手に置いた。

修道士は戸口まで移動し、そこに寄りかかった。時折、部屋の外を覗き込み、ラザロの方を振り返る。まるで少年を見守っているかのようだった。彼は、ヤギの乳に浸したパンの切れ端がフードの下に消えていくのを見守った。まもなく、イワンは壁から松明を引き抜いた。

「松明の包みを用意しよう。終わったらワインセラーで会おう」とイワンは言い、戸口から出て行った。

ラザロは彼に呼びかけた。「修道士よ、一つ質問してもよろしいでしょうか？」

イワンは「どうしたんだ、息子よ？」と答えた。

「なぜゲートストーンは叫ぶのか？」

「叫び声？ なぜそんなに集めるんだ？」

「まるでこの部屋の中で鳴っているかのように、音が大きく聞こえる。」

「ラザロ、そのことについては考えないでほしい。放っておきなさい。」

それが存在することを教えてください。それから、何か別のことを考えてみてください。例えば、鳥、木々、あるいは私たちがよく話してきた、大きく流れる川など。天使について考えてみていいでしょう。彼らは実に純粋な存在です。私たちのために、そうしてもらえませんか？

「承知いたしました、修道士様。」

イワンが立ち去ろうとしたとき、少年が再び彼を呼び止めた。

「鳥は天使と同じくらい高く飛べるのか？天国まで？」

「いや、ラザロよ。」修道士の声は疲れた様子だった。「天国は人間のものだ。地上の獣や空の鳥のものではない。」そして彼は付け加えた。「門石のことは二度と口にしない。誰にも言うな。もう二度と聞きたくない。」

「修道士よ、私は人間なのか？」

「お前はまだ子供だ。学ぶべきことはたくさんある。いつか必ず。もう質問は十分だ、ラザルス。食べる。」

そして、私が門石について話すことを厳重に覚えておいてください。私の言っていることがわかりますか？

「はい、修道士様。」イワンが姿を消すと、ラザロは食事に目を戻した。

～*～

地上、がらんとした修道院大聖堂の濃い影の中、黒い甲虫が細い窪みから現れ、石の床を聖域に向かって駆け出した。朝の月の最後の光の中、聖歌隊席を横切り、祭壇が置かれている石板にぶつかった。床と石板の間には細い亀裂があり、甲虫は翼を広げ、背中を丸めた自分の体を十分に通せる入口を探した。すると突然、動きが止まった。凍りついたように、甲虫は仰向けになった。この虫は入口を見つけたのではなく、

出口　そしてその隙間から、渦巻く生きた闇が染み出していた。

好奇心旺盛な甲虫は、はるか下から放射状に広がる漆黒の闇に飲み込まれて落ちていった。その闇は、まるで光のように敷石を貫きながら上へと広がっていった　しかし、それは光とは正反対のものであった。その光が落ちた場所には虚無があり、月の影でさえもそれに比べれば明るく見えた。

この最も不浄な闇が聖域の端に達すると、祭壇石の下から絶え間ないシューという音とともに砂塵が吹き上がり、まるで火山の噴火口のように吹き荒れた。刺激臭のある硫黄臭が空気を汚染した。薄いガスが割れ目から湧き上がり、形を成し始め、渦を巻きながら密度を増していった。その流動する塊は勢いよく上昇し、飛梁の柱の間を縫うように螺旋を描きながら、まるで閉じ込められたハエのように天井を旋回した。そして急降下し、油っぽい悪臭を放つ雲の触手で聖域を掃射した後、聖職者の更衣室が並ぶ廊下へと消えていった。

更衣室の隅で、床に重くのしかかる雲が、霧が薄れるにつれてゴボゴボと音を立て、内部で成長する暗い塊が現れた。骨、靱帯、組織、皮膚が凝固し、最後には大聖堂の静寂な廊下を引き裂く鷹のような叫び声をあげた。それ以来百回も繰り返されたように、また同じことが起こった。もう一人のグロテスクが誕生した　フランスのモノリスの存在によって生み出された、もう一人のエルジョの子孫。その子は古代の獣のような種族で、地獄の夜明けと同じくらい古く、創造の異常を生み出すほど邪悪な天使と人間との肉体的な結合によってのみ生まれた。グロテスクは女性で、ほぼ人間の姿をしており、体格は6、7歳の少女に匹敵する。彼女は大きなコウモリのような、肉と骨でできた一対の翼を生やしていた。黒い髪、藍色の目、

妖精のような、犬のような耳を持つ彼女の不気味な容姿は、従者の少年ラザルスの若い頃の姿が鏡に映ったものだったのかもしれない。

～*～

飛行中の鳥の視点から見ると、大聖堂と修道院は十字架の形を成し、

垂直な主ホールと、そこから広がる一対の翼部が交差する構造。外側には3組の二重扉があり、十字架の基部に位置する主入口と、各翼部の最も外側に位置する他の扉があった。聖域は十字架の中心、すなわち十字架の頂上に位置していた。一枚岩のような建物。十字架の頭部には告解室、懺悔室、鞭打ち室が並んでいた。十字架の左側には聖具室、祭服室、その他の実務室があり、右側には段状の座席を備えた礼拝堂があった。

夜明け前の暗い時間は容赦なく過ぎ去り、単調な遠くの鐘の音が田園地帯に響き渡り始めた。修道院の巨大な鐘楼が、祈りと労働の新たな一日を告げていた。夜明けの薄明かりの中、修道士たちの長い列が薄い霧の中を漂い、大聖堂の礼拝堂へと向かっていた。外扉の門がカチャカチャと音を立て、教会内の地下聖堂のような静寂が破られた。聖なる行列の先頭に立つ侍者が、煙を上げる香炉で道を清め、穴の開いた金属球を振り子のように前後に揺らしていた。広い中央通路を挟んで、段々になった木製の座席が長い列をなして向かい合っていた。最前列の座席は床と面一で、後方の列は壁に接していた。各座席は一人の修道士のものであり、後方の壁に最も近い指定された客席を除いては、司祭たちの列はばらけ、それぞれが自分の席へと向かった。

イヴァンとオディーノの二人の修道士は一緒に前に進み、同じ通路をよろよろと歩いていった。ほんの数席先で、イヴァンは立ち止まり、クロディウスとグレヴィルの修道士にささやいた。「クロディウス、他にネズミは見つかったか？」クロディウスは反抗的な視線で答えた。イヴァンはニヤリと笑って歩き出し、オディーノは立ち止まり、グレヴィルの頭を軽く叩いた。「グレヴィル修道士をここで掘り起こしたぞ！」不機嫌そうな修道士はオディーノの手を払い除けた。オディーノはくすくす笑い、グレヴィルが唸り声をあげながらイワンの後を追った。「お前の番もすぐに来るぞ、オディーノ！」

「彼らのことは気にしないでいい」とクロディウスは顎を高く上げ、唇を固く引き締めてグレヴィルを慰めた。「修道院長がいなくても、我々は彼ら二人が屈辱を受けるのを見るだろう。」

数席離れたところに彼は座った。自分の下の席が埋まっているのに気付いたイワンはニヤリと笑った。

「ニコラス！」日焼けした元気な若い修道士が顔を上げて彼に微笑みかけた。数ヶ月間修道院を離れていたニコラス修道士は、近くの村ムラの町司祭として滞在していた。ニコラスは言った。「放蕩僧が帰ってきたぞ！」

イワンはくすくす笑いながら、「ムラトの人々は元気ですか？」と尋ねた。

「彼らは指導を強く必要としている。」イワンは頷いて同意した。オディーノが近づき、ニコラスを見つけると、急に立ち止まった。「私の目は錯覚しているのか？」

オディーノが駆け寄ると、ニコラスも立ち上がり、二人の修道士は抱き合った。「また会えて嬉しいよ」とニコラスは答えた。

オディーノはいたずらっぽく彼の耳元でささやいた。「靴職人の未亡人は元気かい？」

ニコラスはため息をつき、床を見つめて首を振った。「彼女は私の信仰心を試しているんだ、兄弟。」近くにいた人々が振り返ると、便秘を露わにしたような顔をしていたので、二人はくすくす笑った。二人の修道士は気を取り直し、座った。修道院の鐘が鳴り響き、集まった人々は静まり返った。

最前列の席から若い修道士が立ち上がり、通路の中央に置かれた演壇へと歩み寄った。演壇の上には、聖書の大きな開いた装丁が置かれていた。彼は演壇の周りを回り、丁寧に辞儀をし、聖書に口づけをした。咳払いをして、指を聖書のページに置き、声に出して読み上げた。「悪を善と呼び、善を善と呼ぶ者たちに災いあれ。」
悪は、闇を光に、光を闇に置いた者、悪は

「キーッ！」司祭は演壇をつかんで振り返り、空気を切り裂くような恐ろしい声の出所を必死に探した。百人以上の目が大きく見開かれた。
彼は彼の横を駆け抜け、聖域へと向かった。皆、口をあぐりと開けた。僧侶たちのほとんどは以前にもその音を聞いたことがあったが、皆同じように困惑した表情を浮かべていた。

ヴォニグ修道院長は眉をひそめて飛び上がった。全員の視線が彼に注がれた。「下級評議会を除く全員は、すぐに寮に戻れ！」ニコラスと他の百人の苦悩に満ちた修道士たちは、朝の晩課を中断し、飛び上がって扉に向かって集まった。修道院長は彼らに呼びかけた。「独房でひれ伏し、私が別の命令を下すまで悔悛の行為を繰り返せ！」イヴァン、オディノ、クロディウス、グレヴィルを含む33人の上級修道士が残った。

最後の司祭が出て大聖堂の扉を閉めると、ヴォニヒは驚いた顔をした残りの会衆をじっと見つめた。彼の顔は輝きを放ち、怒りは嫌悪感に歪んでいた。さらに悲鳴が響き渡った。ヴォニヒの燃えるような視線が僧侶たちの列をなぞると、首を伸ばしていた僧侶たちはうなだれ、好奇心に満ちた目は慌てて床に落ちた。

「あなたたちのうち、誰が責任者なのか？白状しなさい！」しかし、どの司祭も白状しなかった。
ヴォニヒは振り返り、演壇へと駆け寄った。「よろしい、では各自持ち場につけ！」
彼らは即座に従った。その後続く手順を知っていたからだ。新たなグロテスクが生まれるたびに、全員が代償を払うのだ。これまでもそうだったし、今回も、そしてこれから何度もそうするだろう。下級評議会の修道士たちは一斉に立ち上がり、段々になった座席から降りて中央通路に集まった。それぞれがひざまずき、腰に手を当てた。

聖域の前に、3人の調査員は身構えて扉を開けたが、何もなかった。僧侶たちは薄暗い内部に慎重に足を踏み入れた。数着のローブを除いて

布で覆われた彫像や台座、その他の宗教的な工芸品が置かれていたが、部屋はがらんとしていた。

「シューッ！」彼らの視線が上を向くと、翼を広げ、黒い髪を乱し、鈍い犬のような牙をむき出しにして、天井近くの石の棚に止まっているグロテスクな姿が目に入った。彼女は怒りに満ちた言葉を矢継ぎ早に浴びせた。それは耳には奇妙で異国情緒あふれる言葉 天使の言葉だった。

壇上から頭を下げて謙虚に頭を垂れる剃髪した人々の頭頂部を睨みつけながら、修道院長は振り返った。彼は目の前の本に目を向けた。ページをめくると、怒りで首と耳が赤く染まり、耳鳴りや異国の声がまだ響いていた。6人の捜査官のうちの1人が、顎の切り傷を押さえながら戻ってきた。血が指の間から滲み出て、床に点々と広がっていた。

「我々を放っておいてくれ」と修道院長は答えた。「傷の手当てをしなさい」。修道士は頭を下げ、大聖堂の扉に向かってかなりの量の水を撒き散らしながら去っていった。一方、聖域では叫び声や悲鳴が、戦いが続いていることを物語っていた。

まもなく、彼の二人の仲間が近づいてきて、もがくグロテスクな男と格闘していた。僧侶のローブをまとった彼女は、修道院長が演壇で彼らを制止し、床に押しさえつけられた。声はくぐもっていたが、彼女は天使の非難を延々とまくし立て続けた。

ヴォニグは聖書に指を突き刺し、彼女と会衆に向かって叫んだ。「主は言われた、『降りて行け。汝の民は墮落したのだ！』彼の怒りは天井の飛梁を突き抜けて轟いた。修道院長は司祭たちの険しい表情をちらりと見た。不思議なほどの静けさが彼を包み込み、その表情は全く異なる心境に変わった。彼はそっと本を閉じ、表紙を軽く叩き、じっと見つめた。

彼は演壇から本を持ち上げ、高く掲げ、投げつけた。本は僧侶たちの間に落ち、粉々に砕け散った。彼は演壇に身を乗り出し、グロテスクの抗議が彼の激しい非難を遮る中、大声で叫んだ。「汝は我のほかには他の神々を崇拜してはならない！汝は天にあるもの、地にあるもの、地の下の水にあるものの像、あるいはその形を造ってはならない！汝はそれらにひれ伏してはならないし、仕えてはならない。我は嫉妬深い神であり、我を憎む者には父の罪を子に、三代、四代にまで報いるのだ！」

ヴォーニヒは彼らをじっと見つめていたが、まるで道を踏み外した息子たちを見守る父親のように、彼らが悪人ではないと自分に言い聞かせようとしていた。修道院長として、彼らの失敗は自分の失敗であり、彼らの罪は自分の罪だった。しかし、聖人であろうとなかろうと、人間は人間だ、と修道院長は自分に言い聞かせた。

アダムが女性の腰を欲したように 欲望は、邪悪な心であろうと純粋な心であろうと、欲望であり、うねる蛇がアダムの腰を知っていたように。猿から僧侶に至るまで、肉欲は創造の設計図に焼き付けられていた。この新たなグロテスクは、ヴォーニヒの信念 人間は、たとえ自らの信仰の法則を犠牲にしてでも、創造の法則に従い続けるだろうという信念 を裏付けた。

修道院長は演壇を回り、彼らの間を歩き回った。「お前」彼は一人の修道士を蹴り、「この物をどうしたらいいんだ？」

驚いた司祭は「知りません、修道院長。私の物ではありません」と答えた。

「全部お前のものだ」とヴォーニヒは彼を叱責した。「お前は評議会の修道士だ！」彼は別の者へと移り、「お前！どこまで行けるというのだ？」

2人目は「大聖堂の頂上ですか？」と答えた。

「なぜいけないのですか？」と修道院長は問いかけた。

「満員だ。」

「その通りだ もう空きスペースはない。」

「もしかしてノートルダム大聖堂？」

「ああ、でも彼らはそれ以上は求めていない。」

三人目の修道士が口を開いた。「修道院長、北の方に聖地、新しい大聖堂があることを私は知っています。」

贈り物をお送りしてもよろしいでしょうか？

ヴォーニヒはくりと振り返り、彼の言葉を遮った。「だめだ！もうこれ以上、公会議修道院の敷地から彼らを出させてはならない！我々は聖座のすべての修道会に、ガルディエンスとカンチェッロには熟練の石工が溢れており、これらの贈り物を彫刻していると確信させているのだ！我々自身を律することができれば良いのだが。いや、贈り物ではない。罪だ！お前たちの罪が石に封じ込められているのだ！もう十分だ！」

僧侶はヴォーニヒの鋭い視線から目を逸らした。ヴォーニヒは振り返り、二人の間を行ったり来たりしながら言った。「これだけは集めておけ。彫像は、お前たちの罪の永遠の記録に過ぎない。石に刻まれた記録は、お前たちに地獄への正当な権利を与えるだろう。そして、この門石の女の亡霊は」

たちまち、イワンの脳裏には肉欲的なイメージが洪水のように押し寄せた。ルシファエルとの夢の中の交わりという、倒錯的なイメージだ。そして彼は、真夜中の密会が、最初に想像したような夢ではなかったことに気づいた。

「彼女は魅力的だ、そうだろう？熟していて、意欲的だ。そして、ああ、とても喜んでくれる」

イワンは、縛られてもがき苦しむグロテスクに目を向け、それまで無意識のうちに、そして直接的にその創造に関わっていたことを完全に悟った。

「そして、あなたが破滅を招いた時、おそらくあなたの情欲の娼婦の霊があなたを出迎えるでしょう

かつてのように地獄であなたを慰めることはないでしょう。しかし、もはや彼女はあなたを墮落させるために、その不気味で邪悪な魅力で誘惑する必要はありません。もしかしたら、彼女は醜い蛇や竜のような真の姿であなたを慰めるかもしれません。そして、もしその女の亡霊が本当に悪魔自身だとしたら？ああ、確かに、彼はあなたが想像もできないような方法であなたを慰めるかもしれません。もしかしたら、彼はあなたが叫び声を上げている間にあなたの体を汚し、あなたを思いのままに弄ぶかもしれません。ああ、彼がそうするであろう想像力豊かな方法、数々の苦痛。あなたはそれらを数えることができるでしょうか。最も頑固な男でさえ、か弱い少女の涙を流すような無限の方法、その間ずっと燃え続け、永遠に炎の中で叫び続けるでしょう。

「地獄の？」ヴォーニグは全員を睨みつけた。床から聖書を拾い上げ、彼はそれにキスをし、演壇へと戻った。そしてそれを叩きつけ、その怒りが大聖堂中に響き渡った。

イワンは、自分の告白がラザロの安全を脅かすかもしれないと確信しており、正義感と保護欲の強い親なら誰でもそうするように、本能に従って何も言わなかった。修道院長の長々とした独り言は、イワンが新たな悪魔、つまり自分が第二の子の父親であるという新たに明らかになった考えと格闘するうちに、支離滅裂なつぶやきへと変わっていった。

グロテスクだ 第二のラザロ また一つ重荷を背負わされた。彼は顎を食いしばり、足元の敷石に視線を固定した。

修道院長が額の汗を払いながら「怠け者がいるぞ！さあ、また忙しくさせてやるぞ 修道院の新しい鐘楼を建てさせ！」と怒鳴ると、イワンはびくっとした。修道院長は頭を上げ、大聖堂の翼棟の薄暗い上層部を見回した。

彼は両手を組み、落ち着いた声で彼らに自分の構想を語った。「それはより高く、より深くなるだろう。基部は頂上よりも広く、千体のグロテスクを収容できるほどのテラスを備えるだろう。まず、日光。塔は天高くそびえ立ち、これらの石の悪魔の上に太陽が沈むことはないだろう。必要ならば、塔は雲を突き抜けるだろう。次に、聖なる地。あなた方のうちの一人が、

塔に登り、常に祈りを捧げ、残りの人生は懺悔として鐘を鳴らし続けなさい。そうすれば、塔は私たちの聖堂よりもさらに神聖な場所となるでしょう。

最後に、悪を退けるために、塔を円形にし、お前たちの忌まわしいものがあらゆる方向を向くようにしよう。悪魔は地上のあらゆる丘や谷からお前たちの石のグロテスクな像を見て、この地を恐れるだろう。さて、あなたは私にこう言うかもしれない。「建築はそのような塔を建てることは不可能だ。もしそうなら、私の答えは簡単だ。なぜ不可能なのか、実際に建てて見せてくれ。さあ、どう思う？

「キーッ！」グロテスクは暴れ回り、二人の修道士はそれと格闘した。イワンは顎を食いしばった。

「立ち上がれ！」ヴォーニヒが叫ぶと、僧侶たちは一斉に立ち上がった。

「このグロテスク像は、夜明けとともに太陽に晒され、石化されるであろう。」
それから私はそれをイタリア、ウンブリア州のカンチェッロに輸送して設置します。それと一緒に、ド
ミンガス修道院長に手紙を送り、彼の修道院で生まれたグロテスクは
修道院はここに派遣されるだろう。今から我々は、我々の罪とイタリアの兄弟たちの罪を負うことになるだろう。」

「浴場へ行け」とヴォーニヒは怒鳴った。「それを浴槽の柱の一つに縛り付け、明日まで
厳重に監視しておけ」彼は手を軽く振って二人の修道士を下がらせ、彼らは苦しそうにしてい
るグロテスクを教会から運び出した。彼は修道士たちに視線を戻し、「今朝グロテスクを発
見したので、君たちもよく知っているように、この肉体的な結合は昨晚のどこかで起こったに違
いない。もし君たちの誰も父親でないなら、私は
あなた方一人ひとりが、あなた方の配下の司祭や従者と話をすることを期待します。もしあなた方の誰かがこ
の悪魔の父親が誰であるかを突き止めたら、すぐに私に知らせてください。そして、この会議は下級評議会の
修道士のみを対象としていることを改めて言う必要はないでしょう。評議会の事柄について話したり、門
石について言及したりすることは死刑に処せられます。」ヴォーニヒは演壇を叩き、「私は修道院を取り
戻す！さあ、私の前から立ち去れ！」評議会の修道士たちは一斉に振り返り、ドアに向かって列をなした。そ
れを見て、修道院長は頭を下げてこめかみをこすった。

列の最後尾にいたイワンがドアをくぐると、ヴォーニヒが「イワン修道士！」と呼びかけた。

イワンは体を硬直させ、ゆっくりと振り返った。心臓が口から飛び出しそうだった。

「はい、修道院長？」

「何か告白したいことがあるのか？」その瞬間は、まるで何日も続くかのように長く感じられた。

「住職はいない。」

「本当に？」さらに数日が経過した。

ヴォーニヒは再び尋ねた。「あなたは、あなたの地下墓地にネズミがいることを否定するのか？」

「ネズミ？」

「汝、殺すなかれ？」ヴォーニヒは疲れた笑みを浮かべながら、三度目の問いを投げかけた。

「私の僧侶たちが、あなたのあの聖なる地下墓地の従者少年と同じくらい、自分たちの義務を明確に理解してくれていたらよかったのに。」

「はい、修道院長」とイワンは答えた。

「近いうちにまたあの少年に会いに行かなくてはならない ラザロだったか？」

「それが彼の名前だ。」

「彼の体調はどうですか？」

「彼は健康で活動的で、祈りや懺悔にも熱心で、何一つ不自由していません」とイワン
は肩をすくめて言った。

「ラザロはあなたが彼に割り当てた任務をうまくこなしていますか？ 地下ではもっと助けが必要ですか？
補助のためにもう一人か二人従者が必要ですか？ 特に忙しい日には？ もしそうなら、私は

必要な労働シフトに対応できる。

「カタコンベの作業を手伝ってもらうのに、ラザルス従士とオディーノ修道士以上に適任な者はいないでしょう。私たち3人で、与えられた任務はすべて十分にこなせます、修道院長。」

「かわいそうに。彼の境遇は。かわいそうな子だ」とヴォーニヒは首を振りながら付け加えた。彼は深く息を吸い込み、別れ際にイワンに聖書の教えを授けた。「まことに……あなたがたがわたしの最も小さい者の一人にしたことは、わたしにしたことである。」

「はい、修道院長。」

彼らは目を凝視した。

ヴォーニヒは振り返り、大聖堂の内部を調べた。そして、新たに発見された生きたグロテスク像の方向をじっと見つめた。彼の眉は険しくなり、顎を食いしばった。「行ってよい。」

イワンは頭を下げ、新たに発覚した罪の重みに心を痛めながら、急いで大聖堂を後にした。

【第3章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー（1809年 - 1849年）

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~